

◎5月 野木京子

冬の  
満員電車に  
血液の  
何万リットル

長谷川柊香（宮城県）

\*朝の決まった時間帯に走る満員電車。人を運んでいるのだが、それは同時に血液を運んでいることでもあるという発想が印象的。血液が循環しているから人間はあたたかな存在であり、満員電車というのは、人間味のある乗り物なのだ。

終点に向かいし銀河鉄道を  
途中下車して月曜の朝

白野（新潟県）

\*銀河鉄道は天上世界を走り、その終点とは、たぶん死後の世界。ジョバンニがいつの間にか下車して丘の上にいたように、わたしたちも現実世界へと降り立つ。そこが月曜の朝だというのがちょっとユーモラスでもあり、まだまだ頑張って生きていく気になる。

メルちゃんの両脚  
紐で縛り上げ  
人魚になったと喜ぶ娘

広田 土（大阪府）

\*映像的な詩で、幼い女の子の笑顔が見えるようだ。明るくて、それでいてちょっとブラックな世界。そういえば、わたしも子どものころ、人形を縛るのが好きだった。あれはどういう心理だったのだろう。

新一年生に  
おはようございます  
挨拶されると  
認知症の父  
教師の表情に戻る

ビスコ（愛知県）

\*父の表情の変化に、胸がいっぱいになる。頭脳明晰で、生徒たちへの思いやりに満ちた、昔の父の表情が一瞬見えたのだ。新一年生の明るい声も響いて、味わい深い。

誰も責めていないということが  
どうして分からないんだ  
と責められる

ヒラノユリア（神奈川県）

\*表現がユーモラスで、責められて切ない感じも出ている。あなたを責めているわけじゃないのよ、と年長者から責められた経験がわたしもあって、そういう言い方はずるいなあと思いつつも、反論できなかったことを思い出した。

全世界の放置自転車を一尾ずつ  
こたつに招いて話を聞きたい

からすまゐ（神奈川県）

\*放置自転車を見ると悲しくなる。放置されてこんなふうにはろぼろになるまでに、自転車としての人生は、どんなものがあつたのだろう。それぞれの事情を知ってみたい。

見つかった靴は片方だけだった  
安全な場所であるはずの家で

宇井 麻千（大阪府）

\*事件の詳しい背景は一切わからない。わからないから、胸騒ぎがする。両方とも見つからなければまだよいのに、片方だけ見つかるから不安がさらに大きくなる。

細胞は部屋  
地球からみて  
僕らも細胞  
地球を傷つける  
悪い方の

早川 のり（愛知県）

\*人間は細胞で作られているが、がん細胞のように他を攻撃するよくない細胞もある。地球も、動植物や鉱物などが細胞として形作っているふうだが、人間は地球にとって、免疫細胞ではないようなのだ。

夜景を造る照明の群れ  
そのひとつに  
研究室でお茶を飲む僕

レモンマートル（北海道）

\*遠景から、ぐっとカメラが近づいて近景に変わる。自分の存在を外から眺めているカメラワークの視線がおもしろい。場所は研究室で、研究中ではなくお茶を飲んでいるという、その姿にほのぼのする。

帰りが遅いだけで  
心配になってしまうのに  
白骨で帰った子の母の気持ちは

加藤 万結子（愛知県）

\*道志村で骨のかけらが見つかったニュースは辛かった。母の心情をおもんばかることと、自身の子への愛情とを重ねて描いた。「母の気持ちは」と、述部のない終わり方に、深い余韻が残る。